

近代日本におけるキリスト教受容と讃美歌

芦名定道

近代日本におけるキリスト教は、日本の近代化と国家の政策（宗教政策）に規定され、さまざまな障害に直面しつつも、日本社会に浸透してきた。それは、多様な仕方での日本文化におけるキリスト教受容となって現れており、文化的なキリスト教受容は、近代日本のキリスト教を論じる上での重要な視点として、これまでさまざまな研究テーマが設定されてきた。キリスト教の文化的受容は、キリスト教研究にとっての重要性はもちろんであるが、さらにそれは、近代日本の基本的特性を批判的に分析する手がかりとなることが期待できる。これまで本研究会においては、たとえば聖書翻訳に関連した研究が発表されてきたが、近代日本の特性を分析する上で重要なものとして挙げられるのは、聖書とともに礼拝式において欠くことができない讃美歌であろう。この巻頭言では、今後の研究の提案として、讃美歌研究の可能性について簡単に私見を述べてみたい。

讃美歌は、聖書と同様に、明治になってキリスト教宣教が認められて以降、キリスト教会で普及し始め、キリスト教信仰にとって重要な位置を占めて現在に至っている。したがって、讃美歌研究がキリスト教研究においてすでに一つの研究領域として確立しているのは当然のことであろう。しかし、最近の讃美歌研究としてここで取りあげたいのは、讃美歌と小学唱歌との従来問われることがなかった深い関わり合いをめぐる研究である。安田寛、手代木俊一らの大胆かつ実証的な研究によって（以下の諸研究が参照できる）、唱歌として採用された曲にはまず讃美歌として日本に紹介され、その後唱歌に使われたものが少なくないこと、そしてその背後には、明治期に日本における宣教に携わった宣教師と日本人キリスト者の活躍が存在することが明らかになった。

- ・安田寛『唱歌と十字架——明治音楽事始め』音楽之友社、1993年。
- ・手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代——【資料集】外国人による初期日本の讃美歌に関する研究付き』音楽之友社、1999年。
- ・櫻井雅人、ヘルマン・ゴチェフスキ、安田寛『仰げば尊し—幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』東京堂出版、2015年。
- ・手代木俊一『日本における讃美歌』日本キリスト教団出版局、2021年。

興味深い論点は多々あるが、たとえば、次の点が問題となる。一つは、近代日本において

は国家形成のために近代的な西欧音楽の受容が求められたことである（A）。というのも、ジョルジュ・アガンベンが指摘するように、民主主義的な近代国家にとって、喝采や栄光は核心的な意味をもっているからであり、式典での国歌斉唱の意義はここに認められる。

「喝采や栄光の機能は、世論や同意といった近代的な形で、現代民主主義国家の政治装置の中心に依然として位置を占めている。じつのところ、メディアが近代民主主義国家においてかくも重要なのは、メディアによって世論の制御や統治が可能になるからというだけではない。加えてとりわけ、メディアによって栄光が運営や配剤の対象になるからでもある。近代においては消滅したと思われていた、権力のもつ喝采的・栄誦的な面である栄光がである。」「栄光とオイコノミアを同意という喝采の形式と全面的に同一化させたということ、これこそが現代民主主義国家に特有の、またその国家のなす「同意による統治」（government by consent）に特有の力量である。」（ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光——オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社、2010年）

明治以前の日本の政治文化において、アガンベンの指摘するような近代国家が求める喝采の機能を果たし国民が斉唱できる音楽は存在しておらず、近代国家としての形を整えるには、国民が近代的音楽を合唱することが求められた。それは、西洋音楽を学校教育に導入することによって可能になった。というのも、明治初期の日本人は、歌といっても、「都々逸調」「今様」のような「当時の伝統的な音楽しかおそらくは歌えなかった」からである（手代木、2021、17）。そして、初期の音楽教育を担ったのが、アメリカの宣教師ルーサー・ホワイティング・メーソンらだったのである。メーソンは、アメリカ（ボストン）で低学年用の唱歌カリキュラムを開発した音楽教育家でもあり、文部省は音楽教育の第一人者として彼と契約したのである——そこにはアメリカと日本をつなぐキリスト教の人脈が存在した——。

これは宣教師の側からみれば、今様や都々逸しか歌えなかった日本人が学校唱歌を学ぶことによって讃美歌を歌えるようになること意味した（B）。ここから、「日本音楽の西洋化とは、本当は、キリスト教化のことだったのかもしれない」（安田、1993、17）との推測が成り立つことになる。

このAとBをつなぐとき、讃美歌と唱歌との意外な関係が次のような問題となって浮かび上がってくる。

「明治期に、アメリカではやっていた曲が讃美歌として一度に入ってきました。歌詞はキリストを讃える歌で、曲はヒット曲でした。この伝達の役目を当時の宣教師が果たしていた。」「唱歌として現在まで歌い継がれていて、讃美歌として入った方が先なのに、そのことが問われない唱歌があります。《庭の千草》とか、《蛍の光》、《むすんでひ

らいて》、《星の界》、《埴生の宿》などです。」（手代木、2021、28）

安田や手代木が讃美歌と唱歌との関係に注目する以前は、両者は別々の研究テーマとして扱われ、この関係は意識されることはほとんどなかったと言われる（同、31）。「讃美歌と唱歌、及び軍歌はお互いに別なもので、その痕跡がなかったごとく考えてきたのはなぜか。なぜ取り扱わないようにしてきたのか。もしかすると、関係があっても『忘れてしまいたい』と思ったことなのではないか。」（同、26）。

おそらくここに、日本の近代化にとってキリスト教とは何であったのか、日本近代化の特徴とは何かという問題を考える手がかりがあるように思われる。讃美歌は曲と歌詞から構成されているのだが、このことが、痕跡を消去し、関係があっても忘れることができることを可能にしたのではないだろうか。唱歌や軍歌が讃美歌を源泉としていたとしても、同じ曲に別の歌詞をつけることによって、讃美歌という源泉を忘却することが可能になったのである。しかも、唱歌教育が宣教師から主導権を奪い返す形で進められることによってこの忘却は完成されたのではなかったか。「音楽ではどういメーソンにかなわないのを見た当局は、それによって方針を変えたわけではなかった。その攻撃目標は歌詞に集中し、これ以降、徹底的な干渉がおこなわれた」（安田、1993、180）のである。ここに確認できるのは、技術は西洋化しつつも精神的にはキリスト教を排除するという日本の近代化の基本姿勢であり、讃美歌研究は、この日本の近代化の戦略を実証的に論じる場を提供するように思われる。

唱歌は、一見すると、素朴で懐かしいいかにも学校初等教育にふさわしい歌詞であるが、それは近代国家に対する帰属意識に容易に転化するものとなったのではないだろうか。たとえば、唱歌「ふるさと（故郷）」（1914年に小学唱歌の6年生用として発表。作曲者岡野貞一は、キリスト教徒の唱歌作家）である。「兎追いしかの山」という故郷の風景と「父母」「友がき」という親密な人間関係とは、故郷への想いという自然な情感を喚起し広く共有させる力を有するものであるが、近代国家は、この郷土愛を愛国心へと接続させることをその基盤としているのである。

以上の議論は、簡単なスケッチにすぎないが、これまでの先行研究が切り開いた研究の地平に立って、讃美歌、唱歌、キリスト教思想、日本キリスト教史などの研究分野を専門にする研究者が共同研究を行うことは、本研究会がもつ可能性の一つではないだろうか。

（あしな・さだみち 京都大学名誉教授、関西学院大学教授）